

2018年9月27日

《市民文化会館の再整備におけるアリーナ構想について》

(1) アリーナ構想

＜松谷議員＞

9月3日「駿府町地区の文化とスポーツを核にしたまちづくり検討委員会」が開催されました。昨年の懇話会を受けアセットマネジメント課がまとめた8つの論点が、多様な立場での議論となり、「大規模改修の選択もありうる」つまりアリーナありきでないことも確認され今後の議論が期待されるところです。私自身は「市民文化会館の大ホールとアリーナの複合化を視野にいたした」田辺市長の所信表明に3月総括質問において「市民文化会館の大規模改修・リノベーション論」の立場で質疑してきました。

一方で、市長は5月12日「しずおか まちづくりセッション」においても、ホールとアリーナの複合化を前提とする「2020年台半ば」完成めざす市民文化会館の再整備に言及されました。9月6日「バスケットボールチーム BELTEX 発足イベント」でも同様です。5月19日発足した「公共施設を考える会」は8月20日武蔵野市の市民文化会館大規模改修の視察に行きました。まだ25年は使える市民文化会館だけに再整備は市民による徹底討論の中で決定されるべきです。

1. 市長は市民文化会館の再整備におけるホールとアリーナの複合化についてどのような想いをもっているのか、伺います。

＜田辺市長＞

市長は、“ホールとアリーナの複合化について”、どのような「思い」を持っているのかの質問にお応えいたします。

私には二つの思いがあります。それは、開設以来、これまで市民によって培われていた様々な芸術文化を継承していくという思いと、もうひとつは将来、例えば2030年、この施設がどのような機能あるいは新たな価値というものを必要としているのか、ということバックキャストの考えで、つまり、今からどんなことを議論していかなければならないかという、このふたつの思いを兼ね備えて、この再整備に臨んでいるつもりであります。歴史は、大切であります。まちづくりセッションに議員もいらっしゃっていただきましたが、その時のテーマは「照応光来」。歴史を振り返った上でこそ、未来を展望できるということでもあります。昭和53年11月、今からちょうど40前の文化の日に、この市民文化会館は完成したわけでございます。私にもたくさん思い出があります。会館直後、私は高校時代でしたが、一世風靡をしたタケカワユキヒデさん率いるゴダイゴのコンサートに行きまして、そのすばらしさ、新しいホールの中での感動を昨日のように思い出します。松谷議員にもあろうかと思いません。例えば、中ホールで市民劇場という立場で様々な演劇を見て、とても感激をしたという市民もいらっしゃると思うし、あるいは劇団四季、今まであまり静岡市民にはなじみがなかったミュージカルというものに対して、とても感動したという市民もいらっしゃるだろうし、あるいは鑑賞するだけではない演ずるという立場、踊りであ

るとか楽器であるとか、一生懸命練習した成果をあの晴れ舞台のステージで発表するというかけがえのない思い出を持っている市民の方もいらっしゃると思います。ですから、そういう市民劇場で培ってきたこの芸術・文化、これを継承していく、大切にしていくという視点がまずひとつであります。

しかし、それだけでは新しい時代に対応できない。やはり2030年、どういう時代でどういう地域活性化の新しい機能を付加するのかという発想が必要であります。おそらく、議員とは時代認識は一緒だと思います。40年前の昭和の時代は、人口増加、成長の時代でした。しかし、今は人口減少、そして成熟の時代であります。只今、定住人口の増加ということで、悪戦苦闘をしていますが、非常に厳しい状態であります。それは、異論がないと思います。それだけ少子高齢化は全国的な課題であります。しかし、地域経済化のファンダメンタルである人口活力を維持するんだ、定住人口と共に交流人口の拡大をしていかなければならない、これはマストであります。いかにして交流人口を拡大していくか、という中で地域経済の活性化をしかけていくかということとは大事であります。そのために、三次総の中で五大構造を作り、この地区は歴史文化のまちづくりに挑戦をしているわけであります。

なにも文化会館だけではありません。駿府城公園の中では、発掘作業をし、スケールの大きい天守台ということが大変な地域資源だということが判明しております。また旧青葉小学校の所には、歴史文化施設が3年後のオープンに向けて、着々と計画が進んでおります。

あるいは、中堀の中には、葵舟を浮かべてみようとか、セノバから上代橋に行くとところには、追手町音羽町線には賑わい空間の整備が進んでおります。そのような形の一環として、この会館をどういうふうに整備をしていくかということが大事であります。

その中で、アリーナという考え方も出てこようと思います。議員のご指摘の通り、ベルテックス静岡プロバスケットチームを市民運動のなかで市民球団として立ち上げていこうという方々が現れて来ております。あそこには、中央体育館が隣接されています。サブアリーナとして使えるということは、国際試合もできるということでもあります。その中で、芸術文化と同時に文化の中にはスポーツ文化もあります。スポーツ文化も兼ね備えた、そういう受け皿づくりということも魅力あるオプションであり、ポテンシャルがあると私は考えております。

あるいは、5000人とか7000人とか、たくさんの集客力が期待できるアーティストの大規模なコンサートということもひとつの可能性であります。そういう相乗効果の中でどうやって駿府城地区「おまち」の交流人口の拡大を図っていくかということ、これが成熟した文化というものの魅力を見せていく、これが私の「思い」でありますので、ぜひご理解をいただきたいと思います。しかし、様々な可能性がありますが、いずれにせよこの検討に当たっては、現在、駿府町地区文化・スポーツを核としたまちづくり委員会のもと専門的かつ多角的な見地から議論をお願いしているところでもあり、整備方針の決定にあたっては、検討委員会の意見を踏まえて、慎重に判断をしてまいりたいと考えております。なので検討委員会の委員の皆様には、駿府町地区の将来を見据えた大局的な、そしてバックキャスト的な見識のある議論を深めていただきたいとお願いしたいと考えております。議員のご理解をお願いいたします。

(2) 検討委員会における論点整理

<松谷議員>

政治家である市長の想いは理解しましたが、行政のトップである市長の発言とするなら「検討委員会」運営を混乱させるものです。何が検討されなければならないか、お手元8つの論点資料見て下さい。

- 1、5つ目の論点、維持費は大ホール・アリーナ複合化で抑えられる、しかし論点7の既存施設機能からいうと、複合化は大ホール機能確保が困難とあります。このように論点の中には相反するものが存在するが各論点をどのように集約していくのか。

<企画局公共資産統括官>

各論点をどのように集約していくかについては、昨年度の検討により得られた意見をもとに今後検討すべき事項として、「景観・ボリューム」、「稼げる施設・選ばれる施設」など8つの論点に整理し、4つの整備ケースごと評価を行いました。

今後、評価によって明らかになった課題や検討委員会での意見をもとに、その改善策の検討と重要とすべき論点を整理し、再度検討委員会の意見をいただきながら、市民文化会館の再整備の方向性を検討していきたいと考えております。

- 2、私自身は、論点1の景観問題とボリューム問題、この2つの論点が特に重要だと考えます。狭い空間の活用と大規模な施設の両立は非常に難しい選択です。ボリューム問題が想定される中でアリーナ建設を計画地以外の場所で検討しないのか、伺います。

<企画局公共資産統括官>

アリーナの計画地以外の場所での検討についてですが、本検討委員会では、アリーナ機能を視野に入れた市民文化会館の再整備について検討することを前提としています。

- 3、次に、論点6の休館期間です。市の資料だとアリーナ建設の場合に4年半、大規模改修の場合だと1年半。休館期間は市民の文化活動の継続を分断します。文化政策上極めて大きな論点です。

- ①休館期間の短縮についてどのような方法を考えているか。
- ②最大で4年半の文化拠点を失うことに対する文化政策上の対応策はどのように考えるのか。

<企画局公共資産統括官>

休館期間の短縮についてですが、市民文化会館の再整備では、施工方法や段階的な整備の実施など、出来るだけ休館期間の短縮が図れるように検討してまいります。ひとつの例として、現在の市民文化会館大ホールの南側にある広場に中ホールを先行

して整備することで、市民の皆さんに継続して利用していただけるような方法なども検討していきたいと考えております。

＜観光交流文化局長＞

最大で4年半の文化拠点を失うことに対する文化政策上の対応策についてですが、現在の市民文化会館の利用率は、大ホール、中ホールともに8割を超えています。その内容は、大ホール利用の7割が興行利用、中ホール利用の9割が市民利用となっています。

また、作品展示や小規模な催し向けのギャラリーや大会議室の利用率も7割から8割となっています。

静岡市内、周辺市町の施設の規模、利用率を見ると、現在の需要のすべてを周辺施設で振り分けることは難しい状況です。

従って、施設が休館となれば、これらの活動には少なからず影響が生じるものと考えております。

そこで、再整備においては、工法や工区など、様々な工夫を行うことで休館期間を短縮し、本市の文化政策への影響を最小限にとどめるよう、企画局とともに検討してまいりたいと考えております。

4、次に、論点4の駐車場については検討委員会資料が出されています。大ホール、中ホール、アリーナ全体で必要な駐車場は、市民文化会館利用者の自動車分担率19.8%で830台、(1)文化会館246台に加えて500台の駐車場建設をした場合に交差点大渋滞で逆効果だが交差点の改良が必要、(2)駐車場を作らず半径500mの周辺駐車場占有率50%で472台不足、1k圏内の駐車場なら3200台余裕とのことです。この理屈でいくと理論上は中ホール・大ホールのイベント重なった時、雨天時、セノバ周辺の休日時、大渋滞は起きないこととなります。

①アリーナ整備に伴う更なる交通渋滞についてどう考えるのか。

＜企画局公共資産統括官＞

アリーナ整備に伴う更なる交通渋滞について、どのように考えているかについてですが、議員ご指摘のとおり、アリーナ整備に伴う周辺の渋滞問題は、ひとつの課題であると認識しております。今後、シャトルバスの運行やインターネットを活用した駐車場予約サービスといった事例を参考に、検討委員会において議論を深め、本市ならではの対応策を導き出していきたいと考えております。

＜松谷議員＞

先の論点からすれば簡単に「アリーナを作る」とはいえません。

1、休館期間の短縮は中ホールを独立して先行建設すれば解消出来るとのことですが、大ホールと中ホールの機能分散という弊害が生まれます。また、複合化の場合に本来公設である大ホールと「稼げる施設」アリーナとの経営の一体性の確保の困難さが出てきます。

①アリーナの民設民営の可能性をどのように考えているか。

<企画局公共資産統括官>

アリーナの民設民営の可能性についてどのように考えているのかについてですが、民間事業者の資金にて建設・運営を行う民設民営アリーナは現在、仙台市の「ゼビオアリーナ仙台」や立川市の「立川立飛アリーナ」等がございます。今後、アリーナ整備・運営の実績がある事業者へヒアリングを実施し、民設民営の可能性についても検討してまいります。

2、2つ目の論点「交流人口」「回遊性」「まち活性化」です。アリーナ複合化案で交流人口 63 万人と大規模改修 48 万人、15 万人の差です。歴史文化施設 18 万増え、天守台発掘 10 万、中央体育館 23 万、これらの活用で十分です。更に従来の行き止まりの施設から、大・中ホール間の減築による会館前広場と北街道をお堀の橋でつなぐことによる「回遊性」を確保し、歴史文化と芸術文化に江戸の天守台、昭和の市民文化会館、平成の歴史文化施設という建築文化拠点と意味づけ、遠い将来のお堀の水辺の復活を媒介に、40 年間という市民の生きた記憶を持つ市民文化会館をリノベーションにさせる、そのことにより「まちの活性化」が生まれてくると私は考えています。

①アリーナ整備による「交流人口の増加」が「回遊性の向上」と「まちの活性化」につながるのかを伺います。

<企画局公共資産統括官>

アリーナ整備による「交流人口の増加」が「回遊性の向上」と「まちなか活性化」につながるのかについてですが、本市では、歴史文化の拠点づくりとして、静岡市の歴史を紹介する「歴史文化施設」や「桜の名所づくり」、駿府城公園とおまちをつなぐ「追手町音羽町線等の賑わい空間づくり」など、駿府城公園周辺の魅力創出を推し進めております。

市民文化会館の再整備もその一環であり、歴史文化の拠点づくりのなかで、多くの人々の集客が見込める施設として機能させ、周辺の施設やイベントなどの魅力創出の取組と連携していくことで回遊性を向上させ、「まちなか活性化」を図ってまいります。

更に、市民文化会館にアリーナ機能を加えることで、これまで以上に本市を訪れる人の増加が見込まれ、さらなる「まちなか活性化」などにつながることを期待できると考えております。